＜マルサス型結婚＞が歴史事実であるとマズイか？

山田昌弘『近代家族のゆくえ』その2

鈴木繁夫
名古屋大学国際言語文化研究科

母性愛

- 定義:「母親が子供に対して持つ先天的・本能的愛情」
- 母性行動:ルドルフ・シャファー『母性のはたらき』(サイエンス社、1979年)
  - (1)子供の身の回りの世話をする
  - (2)子供に対してよい態度を持つ
  - (3)子供の成長・発達のために知的刺激を与える
  - (4) 子供とのコミュニケーションにより子供の社会性を発達させる

山田の結論：（Edward Shorter流）

- →The Making of the Modern Family. By Edward Shorter. New York: Basic Books, 1975.
  - (1)歴史的に見れば、母親は必ず母性行動をとるものでも、とりたがるものでもない
  - (2)われわれの社会にあるのは、母性愛が本能であってほしいという思い込み、本能であるはずだというイデオロギーである。

- 結論を裏付けるための規範←感情社会学の諸規範を持ち出す
  - (1) 抑制する規範：母性愛は常に表出することが要請
  - (2)適切性という規範：子供がいれば母性愛を感じる
  - (3)感情体験があることへの価値付与：母性愛というものがある
  - (4)特定感情体験への価値付与：母性愛は賞賛されるもの→母性愛がないと子供は育たない

母性愛の起因

- (1) が生じるためには、「自分の子供に対して母性行動をとりたくなる」という規則の学習
- (2) 他人の子供に対しては母性行動をとらなくてもよいという規則の学習

- 母性愛イデオロギー
  - アリエス:子供は(1)かわいがりの対象と(2)教育の対象となる
  - バタンデール : (1)ゆえに(2)をし、母性愛が強制されるようになる。

- 日本の場合には、この強制は良妻賢母の大正期に始まる。

母性愛イデオロギーの功罪

- **(1)コミュニケーションとしての母性愛**
- **(2)記号としての母性愛**
  - (2)が先行してしまい、(1)の内実がおろそかになる。
  - 鈴木：(1)の能力がない女性も(2)を演技し、(1)が内実化する

恋愛結婚と近代家族

- 制度としての恋愛
- 恋愛：人間が人間に近づきたいと思う、もっとコミュニケーションを取りたいと思う欲求に基礎をおく。
- 恋愛感情：主観的に構成される。

- 恋愛と結婚：
- (1)類似点：
  - 快感と生殖という性交渉にかかわる
- (2)相違点：
  - 恋愛が突発的で持続性に疑問がある
  - 結婚は安定的で、経済・身分・年齢への釣り合いが要求される。
  - また二つの親族結び合わせ、夫婦という労働・経済単位の社会機能を持つ

【補足】結婚の様態と機能

- 様態
  - (1)社会的に承認された性関係
  - (2)一定の権利義務を伴う
  - (3)継続性の観念に支えられる
  - (4)全人格的関係であること
- 機能

	(1)対個人	(2)対社会
性:	性的欲求の満足	性的秩序維持
子孫:	子を持つ欲求充足	社会成員の補充
地位:	付与	社会的結合拡大

- 森岡 清美, 望月 嵩『新しい家族社会学』

【補足】結婚の形態

- 形態
  - (1)単婚（一夫一妻婚）
  - (2)複婚
    - 一夫多妻婚　一妻多夫婚　集団婚

モルガン『古代社会』

原始乱婚→血縁婚（夫同士が兄弟、妻同士が姉妹の集団婚）→プルアナ婚（夫同士が兄弟かまたは妻同士が姉妹の集団婚）→対偶婚（一夫一妻だが持続性がない）→一夫多妻婚→一夫一妻婚

恋愛・結婚を包括する社会戦略

- 1)恋愛と結婚の分離
- 例
- 古代ギリシア：少年愛と妻
- 騎士道：トリスタンとイゾルデ
- 源氏物語：
- おいらん遊び

- (2)恋愛を抑圧する
- 「ヒジャーブ」（髪を覆って顔を出す）と、「ニカーブ」（頭をすべて覆って目だけをだす）
- 愛情をなくても結婚は可能

- (3)恋愛を結婚へと結合

【補足】「強制的異性愛」

- 「「強制」されているのは「性愛」そのものなのではないのか。」（アドリエンヌ・リッチ『血、パン、詩』）
  - 性愛は「通常は「異性」に力点がおかれ、あたかも人はバイセクシャルであることが「自然」」←懐疑→同性愛も自然
  - 「自然」とは強制され、自覚的でなければ解放されない

【補足】「恋愛の類型」

- (1)男が女に恋をする
  - 女が男の恋に応える
    - 結婚する:
    - 結婚できない:『トリスタンとイゾルデ』、『野菊の墓』
  - 女が男の恋に応えない
    - 結婚する:『テス』
    - 結婚しない:『雪国』

  (2)女が男に恋をする
  - 男が女の恋に応える
    - 結婚する:
    - 結婚できない:『御伽草子』(遊女でありながら男に貞節を尽くす)
  - 男が女の恋に応えない
    - 結婚する:メディアとイアソン(エウリピデス『メディア』)
    - 結婚しない:**ポテパルの妻とヨセフ(「創世記」39章)**

【補足】日本近代の恋愛

- 恋愛
  - (1) 男女の相愛
  - (2)世間的な打算や物質的欲望にからめとられた結婚制度にたいする反抗
  - (3)「 肉体に対する精神性の優越である。
- 江戸の粋（尾崎紅葉『伽羅枕』）
  - (1)男が女に本気で惚れてはならない
  - (2)肉の快楽に浸りながら、心は別なところにある

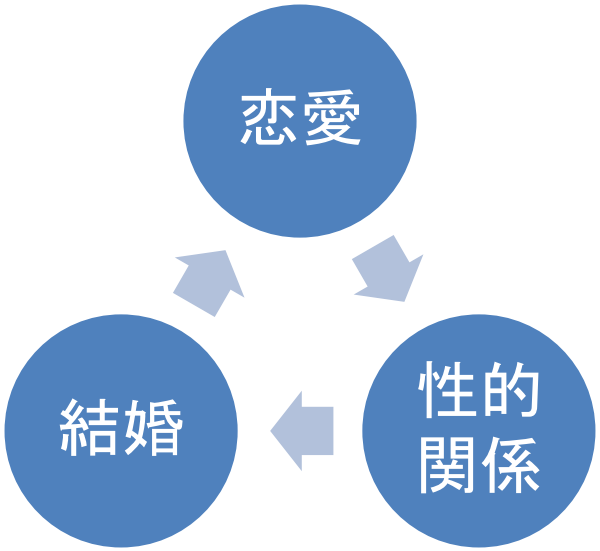
近代恋愛の誕生

- ＜恋愛を結婚へと結合＞という主観的構成規則を抱かせる。
  - (A)恋愛欲求を抱いても、結婚に結びつかない限り、それは正しい恋愛ではない
    - こういう恋愛欲求は、不純・ふしだら・まがいもの
  - (B)恋愛対象となっている人以外に恋愛欲求を抱くことは自体は排除する。
    - 恋人の数はいつも一人。
- 前近代の恋愛:
  - (1)本物と偽物の恋愛という区別はなかった。
  - (2)恋愛は感じてしまうものなので、感情の発生は不問にされた。
- 近代の恋愛:
  - (A)と(B)が同時成り立たない限り、恋愛ではない。
- (1)恋愛の基準がきわめてクリア
- (2)恋愛は結婚へのプロセス
- (3)すべての結婚は恋愛結婚であるべきだという社会通念

近代恋愛の機能

- (1)恋愛は、近親者以外との間で成り立つ→家族外部に発生した感情を家族内部に取り込むのに都合がよい。
- (2)夫婦がそれぞれ記号としての愛情を実践する場となる。
- (3)愛情を感じられなくなったとき離婚してもよい。

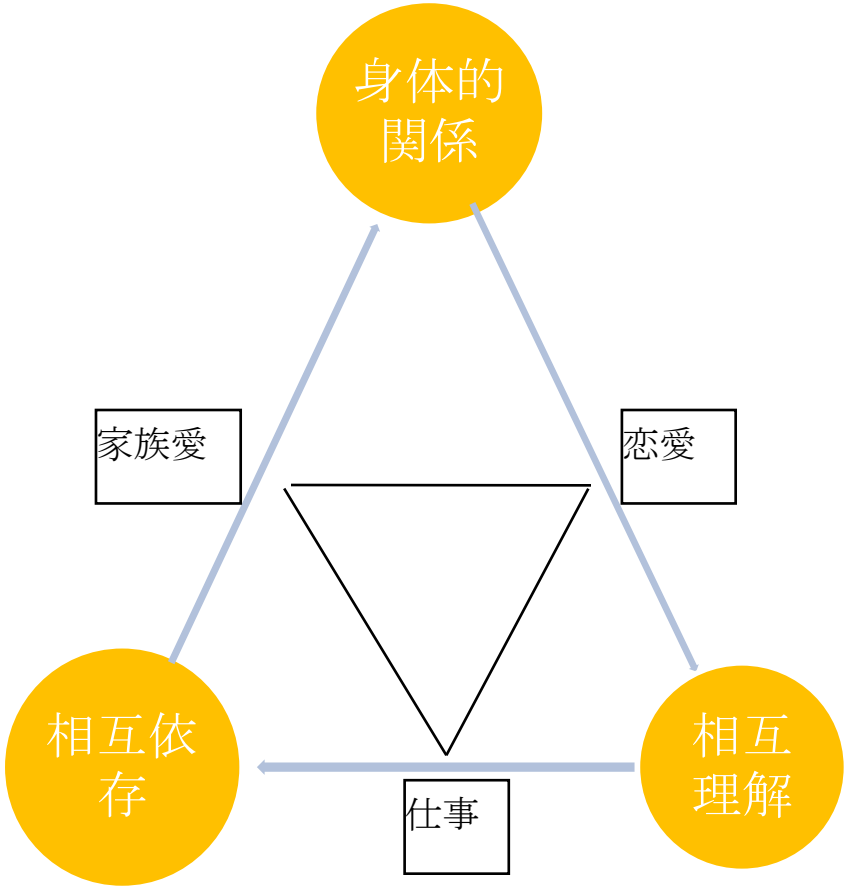
上野千鶴子モデル



恋愛・性愛・結婚の相互関係

- (1)恋愛から結婚へ：切り離す傾向が高まる（1993年調査53%）
- (2)**結婚から恋愛へ**：「出会った後で恋愛に発展」**→結婚愛は成長すると信じられていない**
- (3)結婚から性的関係へ：セックスレス夫婦の増加（推定）
- (4) 性的関係からへ結婚：婚前交渉は否定すべしが激減（1996年否定者の割合　男27%
- 女36%）
- (5)恋愛から性的関係へ：恋愛がない性的関係は動物的行為という観念は不変
- (6) 性的関係から恋愛へ：性的関係がなくとも恋愛はある（ミツグ君、草食系

森永卓郎モデル:



近代家族と愛情の諸相

- 1)仕事は、相互依存と相互理解の場→仕事には家族愛と恋愛を持ち込まない
- (2)恋愛は、身体的関係と相互理解の場→恋愛には仕事と家族愛を持ち込まない
- (3)家族愛は、相互依存と身体的関係の場→家族愛には仕事と恋愛を持ち込まない。
-
- 森永説：
- (1)家族愛に、相互依存と相互理解と身体的関係の三つはセットできない。[→相互理解がなくとも家族愛が成立しているというマインドセットが必要。←この暗黙の提言にロマンティックラブ信奉者からは反発をくらう]
- (2) ①相互理解は共住することによって低減する
- ②相手を変えることによって相互理解と身体的関係は高まる